

品井沼の魚たちが里山里地のため池で受け継がれる

NPO 法人シナイモツゴ郷の会 鈴木光太郎

1. 品井沼が消滅した経緯と沼で生きた魚類

品井沼は南北 3Km、東西 6Km の大きさを持つ水生動物の宝庫であった。沼に流れ込む吉田川と、増水時に小川から逆流して沼に注ぎ込む鳴瀬川が、大量の栄養分を運び込んだことが大きいと思われる。江戸時代の 1698 年に元禄排水路工事が沼の 3 分の 1 を水田に変え、明治排水路工事が竣工した 1910 年からはほとんどが水田に開墾されていく。しかし沼の中心部には海拔ゼロメートル地区もあり、完全に水が消滅したのは、沼と川を分離する昭和 15 年の河川工事が行われた 1940 年であった。

かくて堤防で海に流下する吉田川と鶴田川が、沼跡地に触れるのはわずかな農業用水の取水のみとなった。また、市街地を水害から守る平成の二線堤バイパスが完成した 2013 年からは、4Km に及ぶバイパス道路が東西を分断したため、西の内ノ浦・平渡区と、東の木間塚区との小水路も遮断され、水生動物の移動もなくなっている。

これをうけて生じる最大の関心事は、かつて品井沼に生きていた魚たちが、沼の消滅とその後の環境変化を受け、今はどのように生息しているのかである。この疑問には、次の二つの調査記録がその一端を示してくれている。

沼当時の調査記録と現在跡地の調査記録

i) 旧品井沼に生息した魚類

干拓で品井沼が消える直前の 1931～1934 年に、宮城県が品井沼などで収集した標本に基づき、1938 年に淡水魚生息リストを初めて作成した岡田氏、池田氏の記録が貴重な資料となっている。このリストから当時の品井沼には少なくとも以下の 17 種が生息していた。

スナヤツメ、コイ、フナ、カマツカ、シナイモツゴ、アブラハヤ、ゼニタナゴ、タナゴ、タビラ、ドジョウ、ホトケドジョウ、シマドジョウ、ナマズ、ギバチ、ミナミメダカ、ヨシノボリ類、ニホンウナギ

ii) 品井沼跡地に今も生息する魚類

現在は「シナイモツゴ郷の会」の生き物調査により、まず品井沼跡地である志田谷地区の水路で、上記 17 種のうち、次の 7 種が確認されている。

コイ、フナ、アカヒレタビラ、ドジョウ、

表1 1930年代の品井沼と現在の旧品井沼周辺で採集された魚類在来種

| | 魚種 | 1930年代の品井沼宮城県 ¹⁾ | 現在の旧品井沼 ⁴⁾ | 現在の桂沢ため池 ^{2,3)} | 旧品井沼周辺の里山里地の小川 ⁵⁾ |
|----|---------|-----------------------------|-----------------------|--------------------------|------------------------------|
| 1 | スナヤツメ | ○ | | | ○ |
| 2 | コイ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 3 | フナ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 4 | カマツカ | ○ | | | |
| 5 | シナイモツゴ | ○ | | ○ | ○ |
| 6 | アブラハヤ | ○ | | | ○ |
| 7 | ゼニタナゴ | ○ | | ○ | ○ |
| 8 | タナゴ | ○ | | | |
| 9 | アカヒレタビラ | ○ | ○ | | ○ |
| 10 | ドジョウ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 11 | ホトケドジョウ | ○ | | | |
| 12 | シマドジョウ | ○ | | ○ | ○ |
| 13 | ナマズ | ○ | ○ | | |
| 14 | ギバチ | ○ | | ○ | ○ |
| 15 | ミナミメダカ | ○ | ○ | | ○ |
| 16 | ヨシノボリ類 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 17 | ジュズカケハゼ | ○ | | ○ | |
| 18 | ニホンウナギ | ○ | | | ○ |
| | 魚種数 | 17 | 7 | 10 | 15 |

ナマズ、ミナミメダカ、ヨシノボリ類

iii) 周辺里山のため池や小川に生息する魚類

次に近世に沼の魚を周辺のため池に放流した結果であろうか、周辺里山のため池には以下の10種が確認されている。

コイ、フナ、シナイモツゴ、ゼニタナゴ、ドジョウ、ホトケドジョウ、シマドジョウ、ギバチ、ミナミメダカ、ヨシノボリ類、

また、周辺ため池群を水源とする小川にはさらに次の15種が生息している。

スナヤツメ、コイ、フナ、シナイモツゴ、アブラハヤ、ゼニタナゴ、アカヒレタビラ、ドジョウ、シマドジョウ、ナマズ、ギバチ、ミナミメダカ、ヨシノボリ類、ジュズカケハゼ、ニホンウナギ

〔上記、i) 旧品井沼で確認されなかった「ジュズカケハゼ」を除くと14種類〕

したがって、品井沼跡地、里山ため池、小川には、1930年代に確認された17種のうち14種が存在していた。品井沼に生息していた魚種の82%にあたる魚種が今も生存し続けていることがわかった。

2. 明治期からの漁法

i) 品井沼が明治期に漁業解禁

松山茂庭氏の所領だった品井沼が明治期に解禁となった。約200人の漁師が漁業に従事し、水害による農業破綻を補う命綱にもなっていた。

ii) 品井沼の明治期の漁獲方法

フナの漁法「釣りぶな」は、60センチ間隔に針120本つけた竹40基を設置し、翌朝は150Kgの魚が獲れた。冬は「氷割り」(すがわり)で、竹網(簀立)を沼にV字型に仕掛け、氷が張ればその上を15人ほどが音や振動で魚を追い込む。1回に170貫(640Kg)とれた。「えび」は秋が好期で、網引き、筒(どう)などで獲る。「ドジョウ」も筒を使い、つぶしたタニシや匂いのあるニラを中に入れて餌にした。ドジョウ1貫目(約3.7Kg)が酒1升到に匹敵し、仲買人に売った。また「ウナギ」は針かけのほか、壮観な「うなぎ搔き」で獲り、全長約5mの舟で1日に500~800匹を搔きあげたと伝えられている。沼にはうなぎの餌になる豊かな小魚が存在したことがわかる。豊漁のときは沢の小堀で、土を掘り返してもウナギがとれたといわれている。

引用文献

- 1) Okada & Ikeda (1938)、2) 町史わが鹿島台 (1971)、3) 鹿島台の文化財 (各誌 1978~1994)、